

業務名称	別府市図書館・美術館整備基本構想策定等業務委託	協議日	2016.09.23
		協議場所	別府市役所 4階 4F-3会議室
出席者	(委員長)：中山委員長 (副委員長)：平石副委員長 (委員)：田中委員、鶴田委員、須股委員、澁谷委員、池田委員、豊田委員、渡辺委員、加藤委員、明石委員、大鶴委員 (オブザーバー)：花井裕一郎氏		
	別府市教育庁生涯学習課（事務局）		
	アカデミック・リソース・ガイド (ARG)		
01. 資料	・委員会次第 ・委員名簿 ・別府市総合計画 後期基本計画 ・べっぴん未来共創戦略 ・検討委員会の目的及び委員会の進め方について ・図書館・美術館の現状と課題 ・市民ワークショップ実施計画書 ・今後のスケジュール		
02. 検討事項	第1回 別府市立図書館及び別府市美術館整備基本構想検討委員会 要約：委員委嘱式・想いを共有する ■委員委嘱状交付 ■教育長あいさつ ■1 委員会委員長及び副委員長の選出 委員長を中山委員、副委員長を平石委員とする。 ■2 検討委員会の目的及び委員会の進め方について【説明】 (ARG) 別紙の通り説明。 ■3 図書館・美術館の現状と課題について【報告】 (ARG) 別紙の通り報告。 【質疑応答】 (C委員) 美術館は英語では「アート・ミュージアム」という言い方をするように、「ミュージアム」と言った場合、美術作品を扱うものと博物資料とを扱うものがあるが、どちらかに限定して考えていくのか、それとも包括的に考えていくのか。 (事務局) 現段階では定義づけをするのではなく、まずは委員のみなさまの意見をお聞きしたい (ARG) 別府市美術館は多様な施設である。美術作品が多数あるのと同時に、農具や昔の紙幣を扱う、美術館であり博物館でもある施設であり、ただの美術館ではなく「ミュージアム」である。 (アドバイザー) 美術館、博物館どちらかにこだわるのではなく、より広い視点で考えたほうがいい。		

(G委員) 別府「市立」図書館、別府「市」美術館というように、名称が違うのは何故か。

(事務局) 特に理由は無い。

(アドバイザー) 現在手がけている太田市の施設は、「太田市美術館・図書館」(仮)としている。愛称にするのか、「市立」といった名称を使うのかどうかについては今後も検討してく。

(N委員) 基本構想での議論の着地点はどこか。

(事務局) あるべき姿・コンセプトまでである。ハードについては基本計画で議論する。

■4 各委員より図書館・美術館に対する意見(想い)の発表

(事務局) 自己紹介を兼ねて3分程度で発表をお願いしたい。

(C委員) パブリックな施設は地域の文化のバロメーターとなる。みんながよろこんで、安心して安全に利用できる、観光客や海外からのお客さまにとっても「すごい」と言ってもらえる施設、みなさんが自由楽しく使える場所にしたい。

(B委員) 日本史学出身で資料整備等をしており、かつては国立情報学研究所に勤めていた。全国の博物館や美術館が持っている資料デジタルアーカイブ化に携わっており、地域学・地元学として、中学や高校の社会科の先生たちと一緒に総合学習の授業のお手伝いをしている。図書館と美術館を一緒につくっていくので、アーカイブや資料をきちんと整備して、市民にどのように活用してもらえるか考えていきたい。情報を発信するには自分たちがまずは気づかなくてはならない。自分たちが地元のことを知る場としての美術館・図書館を考えていきたい。

(J委員) 大学で司書資格のカリキュラムを履修している。高校のときに司書に図書館の使い方を教わったのがきっかけで履修をしようと思った。中学のとき、学校図書室が吹奏楽部の練習場所になっていたのが、図書館の使い方を教わった後からはずっとショックだった。そのまま大人になったらわからないことだったと思う。先生方も、図書館の使い方をわからないままだったので、そういった学校図書館になったのだと思うとくやしい。図書館の使い方などを教えられるような教育が実現すればよいと考えている。

(L委員) 別府とはなんだろう? ということを最初に考えないといけない。温泉だけで12万都市なのは別府だけである。由布院は「農村」と「温泉」だが、別府は多様性のあるまちである。ソーシャルインクルージョンというか、別府が先頭に立って、取り残されるひとのない社会にしたい。別府にはBEPPU PROJECTという実績がある。一般的な美術館にプラスして、広い意味でのバリアフリー、老人も取り残されない社会をつくっていきたい。図書館は専門性が問われる施設である。温泉についての世界中の論文など、文献が全部そろっている、福祉系の専門書がそろっているのが望ましい。サテライトというか、大量の分室があるとよい。また、別府市は刷り物が多い。ポスター・チラシの収集が必要である。絵と文学作品の融合、公園のなかに文学作品の紹介があるなど、文学・音楽・美術が一体となったものとするのが大切である。「デパートメント」から、集めていく作業をし、それを担う施設になれば、世界に誇れる施設となると考える。ITを利用して利便性を高めることも大切である。別府のまちこそ美術館である。

(N委員) 別府市に住民票を置き、TBSテレビに勤めている。18才から東京へ移り住み、月の半分は東南アジアで番組を作っている。地元の小中高生が進路を決める際にアドバイスをするNPOと関わりを持ち、講師を務める機会があった。別府市との関わりでいうと、ベトナム国営放送で別府市を扱う番組をつくらうとしており、11月にロケを予定している。子どもの頃から別府市の美術館や図書館を利用していた。大学受験の勉強も、サザンクロスへ通ってしていた。ニューヨークに海外特派員として5年ほど在住していたときには、MoMAのような施設に多く通った。東京でもミッドタウンなど、

いろいろな美術館に行く機会をつくるようにしている。別府市がつくるということであれば、ハコモノではなくて、別府市自体が美術品のようなまちなので、温泉を活かすのであれば、別府市はいずれ世界遺産のまちになると信じているので、図書館に行ってみて手に取れるような文献があることはもちろんだが、図書館や美術館が軸になって世界に発信できるようなものをつくっていくことが大事であると考えます。また、これから高齢者が増えていくので、アクセスの面への配慮が必要である。先日、別府市竹細工伝統産業会館へ行ったが非常に遠かった。車が無いと行けないし、外国人に行けというのも大変申し訳ないと思う。せいぜいトキハくらいの位置にあるべきなのでは。

(I委員) 中学校で美術教師をしている。美術館では、絵を描く人の筆使いや材質を直に鑑賞できるので感動が大きい。何年か前までは「別府現代美術展」というのをやっていて、全国から公募で集まったセミプロやプロの方の作品を直に見られるという感動があった。ただ、絵に興味がある人だけのものではないようにしたい。例えば、若者には絵を描くのが好きであり、得意な人が多い。地元の子どもたちの作品を集めて展示すると若者の関心が高まるのでは。漫画やイラストが好きで若者が集まれるような美術館ができればいい。図書館は、最近行ってないが、ジャンル分けがされていて面白く、毎週調べに行ったりもしていた。いろんなジャンルで面白い書籍を所蔵する施設になればと思う。

(H委員) 小学校教員として、図書館教育担当の立場で参加した。別府出身であり、図書館や美術館は個人的に利用するよりは、学校の子どもたちと利用することが多かった。自分の学校の図書館も今年から司書が常勤となった。司書と話す時間も増えたので、どんな本を置いたら子どもたちが興味を持つか、調べ学習のときに役立つかということをや日々相談している。司書のおすすめで、学校の図書館にもたくさん本があるが、市立図書館の団体貸出サービスを利用するようになった。クラスで50冊、担任が選んで貸出してもらい、3ヶ月学校に置いて、期限がきたら返却する。子どもたちは自分たちだけでは図書館に行けないので、大人と一緒に行くわけだが、休日や放課後に親子で利用しやすい、行きたくなるような図書館にしたい。美術館には、去年の9月にファーストミュージアムということで、県立美術館に招待してもらって小学生みんなでバスで訪れた。小さい子にもわかりやすく説明してもらい、子どもたちも興奮し、自分も勉強になる一日となった。別府市では、3年生になると社会の授業で昔の道具を勉強しに、竹細工伝統産業会館とセットで美術館を見学に行く。美術品だけでなく、昔の道具を見られる今までの美術館のように、子どもの目線からもためになるものがあるあり、勉強にもなる、発見のある場所としたい。

(N委員) 文具と画材の店を駅前経営している。図書館と美術館をつくるというのは夢であり、ぜひとも参加したいと思っていた。かつては小学校の教員をしていた。自営業であるため、美術館に通うことも多い。今の美術館は素晴らしい作品があるのに関わらず、保管する湿度や温度管理ができない状態である。別府市民が訪れて楽しめて、得るものがないといけない。どうやったらみんながワクワクして美術館や図書館に行けるか考え、別府市民が楽しめるような美術館・図書館を目指したい。お店をしているので、お客さんたちの意見も吸い上げて発表できるのではと思う。「言ってもだめだ、きいてもらえない」という声もあるが、自分たちの意見も出して、透明性のある議論の過程を楽しみながらつくっていききたい。図書館に関しても同様に考えている。

(K委員) APUの3回生。図書館・美術館は身近な場所である。名古屋出身で、別府に住んで2年半ほどになる。兄弟が4人おり、弟や妹を連れて図書館に行っていた。高校の図書館には学校司書が3人いた。APUの図書館は騒がしいが、それが普通であると考えている。小学校の図書館もディスカッションをする場所だったので、図書館で静かにしなければならないという概念は持っていない。別府の図書館は小さくて、こんな言い方をすれば失礼かもしれないが、別府に住んでいるお子さんがかわ

いそうだと思う。インターネットで「自殺するくらいだったら図書館においでよ」という言葉がひろがっていて、自分もそれに救われた一人である。友達とケンカしても、図書館で本を見ているだけで落ち着くが、別府にはそういう環境が整っていない。美術館に関して言うと、名古屋には駅につながっている「ポストン美術館」というのがある。交通も便利で良い絵がたくさんあるが、PR がうまくいっていなかったのか、閉館することが決まった。駅に近いから、良い絵があるから必ずしも良いわけではない。別府にはAPUがあり、日本で一番留学生が多い。それを活かして、国際都市別府と謳っているのであれば、図書館に英語の本や絵本があったり、各国のコーナーをつくったり、絵手紙交換をしてそれを展示するとか、いろいろな方法があると思う。

(G委員) 大分県教育委員会に勤務している。社会教育課という、県立図書館の担当課である。子どもの頃から図書館や美術館が好きで通っていて、私的にも言いたいことはたくさんあるが、まずは公的な発言からすると、社会教育施設らしくあって欲しいと考えている。知の循環型社会を作っていくという意味では、社会教育施設の役割はとても大きい。今日の午前中には、日出町で女性団体連絡協議会の団体みなさんと研修会をしてきたが、そういう団体の方が図書館や美術館で学び、それを自分たちの活動に活かしていけるような活動をしていければいいと思う。文化の無いところに地域社会は育たないという言葉聞いたことがあるが、本当にその通りである。別府市のいろんな文化を活かした施設ができればいい。私的には、県立図書館はガラス張りで暑く、職員にとっても利用者にとっても過ごしにくい場所であると感じている。デザインも大事だが、使い勝手がよくないと使われなくなる。例えば、ハイヒールで歩くととても響いてしまう。先日、新聞の投書でも、「子ども連れでお話教室に行ったら他の来館者からうるさいと言われてしまった」とあった。子ども連れでも楽しめるような、防音が効いたような部屋があったらいいのではないかな。県の職員だが、県立美術館よりも、大分市立美術館の方が個人的には好きである。たくさんベンチがあって、緑が豊かで居心地が良い。別府はそういう美術館を目指さないというのであればそれも有りだとは思いますが、多様な意見を聞いてとてもワクワクしている。オノマトペも大事だと感じた。みなさんにオノマトペを言ってもらって、どんな施設にしたいか言葉にしてもらいたいかもしれないと思った。

(D委員) 全国で80箇所、海外で3箇所、観光まちづくりをお手伝いしている。大分県の美術館は集客に苦戦している。一番良かったのが「進撃の巨人」で、その後は苦戦しているが、大分市美術館がとても頑張っていて、逆に刺激を受けている。たった50万都市の中で2つの美術館があるので競争は激しい。人口が減少するなかでパブリックなハコモノをつくるには、どんなものかいいのか考え続けていた。今まで見てきて印象に残ったものを挙げると、例えば十和田市現代美術館はとても素晴らしかった。金沢の鈴木大拙館もひとつのコンセプトとして優れていると思う。図書館では、青森のアウガへ中心街が一番良かった時に視察をしたが、今では経営破綻してしまっている。ぎふメディアコスモスは素晴らしかった。館長がコミュニティの場を中心に図書館をつくっていくという考え方で、とてもよかった。ソフトウェアは、そこでマネージメントしている人による。つくった後のマネージメントがとても重要であると感じた。いろいろ見てきた中で、考え方を一緒にまとめていきたい。

(E委員) 別府にしかない宝物は温泉である。その資料整備をして特別なブースをつくり、別府の子どもたちが温泉文化を味わいながら成長していく、そのような資料館的な場所があるとよい。観光客もそこでいろいろな知識を得て温泉に入ることによって別府の特性が活かされるのではないかな。温泉や竹など、文化的な遺産を資料館として集めることができればいい。活字文化は人を育むものである。図書館は行くところ、美術館は来させるところという発想をやめて、どちらも自ら行き、別府市民の文化水準が上がっていけばいい。別府市のこれからのイメージを払拭するには、融合化が一番大事である。

(委員長) 専門は温泉地理学。2000年に別府へ移住した。それまでは千葉県で高校の教員をしてい

た。別府市では総合計画にも参加していた。観光や福祉面でも先進的な地域とし、社会教育施設、知の拠点としての役割というところで、観光客をターゲットとした社会教育、観光客が知らず知らずのうちに勉強してしまうような施設にしたい。宿泊施設でも美術作品を所有していると思われるし、大学でも本を中心とした資料がある。美術系の学部もあり、APUがあって世界に開けているという特色もある。全部ひっくるめたら大変なものができるのではないか。具体的な予算の検討もこれからであり、ここで議論したことが実現できるかどうかということではあるが、われわれが話を煮詰めていって凝縮させて、市長に対して「これはつくらないとまずいぞ」と思ってもらえるようにしていけば、夢物語が現実的になっていく。フラットに意見交換し、議論を進めてもらいたい。

■5 市民ワークショップ実施計画書について【説明・審議】

(ARG) 別紙の通り説明。

【質疑応答】

(K委員) 参加者は3回すべてに参加しなければならないか。参加者はどのように選ぶのか。

(事務局) 日程の都合もあるので、必ずしも3回参加しなければいけないというわけではない。公式サイトや市報で広報を行い、11月中旬までに参加者を決定させる予定である。できるだけ高校生・大学生など、若い方を集めたいので、公募として声がけすることも考えている。

(委員長) 募集は初回の1回のみか。

(事務局) 1回の予定である。

(C委員) テーマについて、もう少しポイントを絞ったほうがいいのではないか。

(ARG) 「図書館以外に本と出会える場所は？」「本を読みたいと思う場所は？」といった、ポイントを絞った問いかけをする予定である。

(委員長) 和歌山のワークショップでは、まち歩きと図書館とのつながりは、参加者も理解できていたか。

(ARG) 和歌山というまちにとって重要なテーマをみつけようということをやっている。その中で出てきたのが、歴史や観光などのテーマであり、そのテーマを各チームが選んでまち歩きをした。

(N委員) ホームページや市報は見えない人が多いのではないか。図書館に掲示したり、ケーブルテレビで告知をしたり、積極的に募集を掛けたほうがいいのではないか。

(事務局) 報道への掲載依頼文を提出予定である。

(C委員) 大学や公民館などに出向いて依頼をしたほうがいい。

(事務局) 学校への声がけも考えていきたい。

(委員長) 中学生の参加について池田委員は教員の立場からどう考えるか。

(I委員) 子どもが見ても、親が見てもわかりやすい表現で募集をかけることが大切。

(委員長) 保護者の同意書があれば可能か。

(I委員) 目的とやることがはっきりしていれば、各学校の担当の先生の賛同が得られると考える。

(L委員) 大人と中学生が同じチームで実現可能なのか。

(ARG) これまで実施してきたワークショップでは、様々な世代を混ぜてチームを組むようにしていた。若い人たちの声に耳を傾けるところからスタートとしながら、大人の側も自分たちの声も出していくことが大切である。自分の意見をぶつけ合うだけでなく、「わたくしたち」という観点を持ってもらいたいと考えている。

(M委員) みんなが図書館や美術館を考えていこうとする姿勢、みんなが関心を持てるようにするこ

とが大切。もっと先生方にも協力してもらって広めてもらうことが大切である。

(L委員) ワークショップよりも、自分が考える夢の図書館の作文を書いてもらったほうが効果的なのでは。

(K委員) 中学生を呼ぶなら一人では参加しない。図書委員や生徒会など、ひとつのかたまりとして参加してもらうのがいいのでは。ワークショップを開催するのはとても良いことだと思う。夢の作文を書いても、そこで終わってしまう。留学生に別府市の魅力とは何だと思いかをアンケートをとったが、「無い」と答えた人が多かった。別府の魅力を知らない図書館はつukれない。そこを知るためにも、違う世代の人と話をすることは大切だと思う。知識を得る意味にプラスして、ディスカッションする意味でワークショップは必要だと考える。

(C委員) 一般市民からすると、美術館はアート・ミュージアムだと思う。2回目のテーマが「アート」であると、博物館としての役割が伝わらないのでは。検討委員会についても、テーマをもっと絞ったほうがいいのでは。

(E委員) 公募のターゲットを絞らないとさまざまな世代の参加者がでてこない。各学校に代表として参加してもらうくらいの配慮が必要なのでは。

(委員長) 事務局側で再考した案をメール等で回覧する。

■6 今後のスケジュールについて【説明】

(ARG) 10/16、17、18、ヒアリングにご協力いただきたい。

■7 連絡事項

(事務局) Facebook ページを作成予定。詳細が決定したら連絡する。

(D委員) 建築コストと運営オペレーションにかかる費用はどのくらいなのか。議論に入る前に資料を頂戴したい。

(ARG) 10月に調査報告をお知らせする。

(アドバイザー) 図書館では楽譜もアーカイブしている。読んでわからないものは体で経験するという意味で、例えば図書館で、その場で演奏するということもありうるのではないか。タイムシェアリングを取り入れ、静かな時間と演奏したい時間とをわける方法もある。「図書館＝本」だけではない。次回委員会までには、図書館法を必ず読んでいただきたい。図書館法には「静かにしなくてはいけない館」とは書いていないし、「本」という言葉も出てこない。「資料」は本だけでない。また、観光と図書館がキーになるのではと考えている。福智町では、中学生が積極的に参加し、設計者と一緒に行動してまちをつくっている。その資料も次回は持参したい。ハードではなくて、ソフトが大切と考える。この図書館・美術館で何がやりたいのかを考えた上で、ハードを付与していく。ぜひとも図書館を使っていない、美術館を使っていない人の意見を聞いてきてほしい。これから実際に使ってもらうのは、これまで使ったことがない方である。そういった人々が訪れなければ新しい施設をつくる意味がない。図書館・美術館「構想」を「妄想」ととらえるくらいで考えて欲しい。

以上